

教 名 聞

第 106 号
(発行日)

2019 年 7 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

自我と浄土教の救い

「自己中」という言葉を時々聞きます。これは利己主義という意味で使われるのでしよう。いわば自我を中心に考え、自分の生存と安全を確保することに第一の関心をもって生きようとすることなのでしょう。

自我とは日頃「私・私」と思っている当体、毎日いろいろなことを望み選び決定する働き(意識)とでもいえましようか。

自我を自己とし自我を中心に、自我の欲求にしたがつて物事を選んでいく、そういう生き方は自我主義ともよばれています。自我主義とは八木誠一氏によれば「自分自身に関心を集中して自分にとって都合のよく作られた自己イメージの実現のために配慮することである」と定義されています。

このことを卑近なことからの中で考えてみます。

たとえば会社を立ち上げて成功することを人生第一の目的に据え、それに向かって努力する。そのことはなんらとがめられません。難はされません。

しかし、こういう努力には必ず競争がつきまとい、勝敗があり、自分の事業に賛同する者を愛し、妨害する者を憎むことになりかねません。愛憎の煩惱がつきまといまいます。

あるいは博士やピアニストなどになることなどが人生の第一の目的になると自分より才能のある人に嫉妬したり、評価してくれる人を愛し、評価しない人を嫌う。また人と比べて自分の能力にたいして誇ったり逆に劣等感で落ち込んだりもします。

また、このことを社会の問題にまで広げてみることもできるのではないのでしょうか。この世で富める者と

*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

《 孟蘭盆会法要 》

八月十日(土)

午後二時始まり

* * * * *

貧しい者の無い平等な社会にすることが人生第一の目的であれば、それを妨害したり、逆らう人たちを敵として見るようになり、反社会的な分子であるとのレッテルを貼り、これを排除しようとしがちです。それが進むと自分たちに逆らう人

たちを粛清するなどということも起こりえましよう。こういう事は集団として起こるのがつねですが、このような組織や団体に属している一人一人の価値観の中にはこのような自我中心的な考えが大きく影響しているのではないのでしょうか。

こういうように自分(たち)にとって都合の良い事柄の実現のために配慮し生きようとする、こういう生き方は自我主義的生き方といえましよう。

こうした例は枚挙にいとまがありません。

ただこういう自我主義は「我意、我執、我愛」の心が根になつていましよう。要するに関心が自分(たち)にばかり向いているのです。

この自我主義は倫理や宗教の上にもいえましよう。

善き行いをすれば、その結果として幸せが報われると聞いて善い行いに心がける、ということがあります。いわゆる因果応報の倫理観であり、真宗では《罪福信》といわれています。

善行をすれば自分に都合の良い果報(家庭平和とか事業の成功とか健康など)が報われるのを期待して善行に励むようなすがたです。しかしそれは、要する

に自己の利益や幸せに関心がひたすら向いている。

親切をするといっても、その心は他者の苦しみへの共感からの行為ではなく、親切をすることによって自分が良き報いを得ようというのであって、その根にあるのは我執・我愛の心です。

さらに宗教的な場面でも同じです。修行してドカンと一発悟って偉い者になろうというような修行は自我中心の修行であって、道元禅師は、悟って偉い者になろうというような禅修行を批判し、「作佛をはかることなかれ」と厳しく戒めています。修行して悟って聖者になろうとする営みの中にも、その根に我執・我愛の根性があるのです。

また、親鸞聖人のお言葉に、浄土に往生しようとする人とか世を捨てて仏道修行しようとする人について「この世のひとは、無実のころのみにして、浄土をねがうひとは、いつわりへつらいのころのみなりとき

こえたり。世をすつるも、名のころ利のころをさきとするゆえなり」（唯信鈔文意）

と仰せられて、凡夫が浄土に生まれようと願う中にも自分の樂を求める我愛の心が潜んでいる、また出家して道を求めるという求道生活の中に、なお人から尊敬されたい、そして多くの供養を受けたいという我執の心がへばりついている、との厳しいお言葉であります。

仏教を学ぶ者にも、仏教を学んで仏教学者になつて人から尊敬され、経済的に有利な立場に登りたいという野心が入りやすいのです。

こうした自我中心の心に我執・我愛・我意が根になつていて、それでもつて仏法を求め、そうなりやすいのが煩惱具足の凡夫の求道の姿です。

真宗の聞法に於いてもこの心が根になつて聞いている。それを自力の心と云われるのではないでしょう。宗祖は

「自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいこのころをもつて、身・口・意のみだれごころをつくるい、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり」（ご消息）

と言われ、諸行・諸善を行つて自分を浄化して浄土に生まれようとする、そういう生き方を（自力のはからい）と言いますが、そこにも根には「我をどこまでも立てよう、我を理想的な我にしよう、我を立派に仕上げたい」という「我への自己関心」いわゆる我執我愛の心があります。

「自分を理想的な自分にした」というのは、いかにも良さそうですが、そこにあるのは自己関心、自己高挙への願望があるといえましよう。

そして仏道修行によって自分が人より高い境地になるとなると、人と比較し、その自分にうぬぼれ（自分に惚れる）、自分より勝れている人を妬み、劣れる人

を軽蔑しかねないのです。そうなると修行して無我になるのではなく自我拡大に過ぎなくなります。

自分が仏法を聞いて、理想的な姿になつて、いわゆる「めでとうなして」助かろうとするのは自我の計らい、自我への執着です。信者になつて助かろう、有難うなつて助かろう、仏法が分かつて助かろうと、どこまでもこの自分をなんとかして、なんとかなつて助かろうとする。そこに深い我執・我愛があり、どこまでも我を立てようと計らうのです。

そういう自我による計らいを全面的に否定し、その姿を罪悪深重と否定し、「すべて地獄行き」と否定し、「どこまでも助からぬ者」と否定して下さるのが南無阿弥陀仏です。

そしてそういう（助からぬ者をこそまるまる引き受ける）の大悲を聞かして下さるのであります。どんなかの歌に「タノメとは 助かる縁の無き身ぞと 教えて救う

弥陀の喚び声」

というのがありますが、弥陀の本願の教えによって我が身は 我執我愛の塊と知らされ、同時に、その我に「タノメタスケル」と仰せ下さる南無阿弥陀仏に我が身を引き渡す、というか引き渡さざるを得なくなるのです。

引き渡された自我はアミダ仏にすでに支えられていることを知らされず。撰取したもう大悲の親に支えられて自我はその処を得しめられるのであります。

真宗ではよく「自力聖道門では悟れない。他力浄土門でなくては救われない」などと云われますが、その真相はどういうことなのでしょう。

その真相は、自力とはどのような自我の計らいでもつて、たとえ修行に励み善を行つても、自我愛が根になつている修行は成就しないのは理として当然だからではないでしょうか。

どれほど学問をし修行をし、善行に励んでも、「自分をなんとかしよう、理想

的な人間にしよう」と言う、そのことの中に自分自身にとらわれ、自分を高みにあげようともくろむ自我心があるからではないでしょうか。

では逆に他力浄土門で助けられるというのは、なぜでしょうか。これについて

論じられることはあまり聞いたことがありませんので、独断になるかも知れませんがこう考えたらどうでしょうか。

繰り返しになりますが、本願のお助けを聞き、お念仏を申していくところに、我が身は実践し善に励むとも我執・我愛を離れられない者であるといよいよ知られてきます。

念佛詩人と言われた木村無相さんは最晩年、「自分は七十年求道に生きてきたが、いよいよ感ずるのは、自分は我執・我愛の塊である。じつにひどい根性である」と何度も仰せになつていました。要するに死せる屍であり、逆謗の死骸であると、仰せられていました。そこに、南無阿弥陀仏を

聞かせていただくとき、「そんなお前であることは弥陀がすでに知り抜いていること、そんなお前だから、我にまかせよ、ただ念仏するだけでよい」との仰せ、「タノメ、引き受ける」との大悲の仰せを聞く、聞かされるのであります。

そうするともはや南無阿弥陀仏に身をゆだねざるを得なくなり、お粗末な自分を引き渡さざるをえなくなり、大悲をたのみざるをえなくなり、もう自分を見限ってしまう。もはや自分を省みる必要もない。自分を相手にしなくなる。自分を見限るといいう形で自分を手放すのであります。弥陀の前に手放す、投げ捨てる、ゆだねる、お任せする、自分に愛想を尽かすのです。もはや価値なしと見放すのです。

このような自我の塊の我をいったん見放し見限るところが可能なのは、それこそ自分の力ではなくて、南無阿弥陀仏のお心を聞き、自分の無価値を知り、しかも

アミダ仏は「我が引き受けて汝を仏にする」と喚びかけて下さいますから、もはや我に用無しとアミダ仏に自分を引き渡す、そうすると、不思議にアミダ仏と離れない身であることが知られます。いわば摂取不捨の利益にあずかるのであります。

ひとたび自我を離れてアミダ仏に身をゆだね、摂取不捨の利益にあずかるのであります。悲しいかな、すぐその後から自我の執着が起こってきます。

自分の利益を計り、損得を図り、愛憎の思いが起こり、人と比べる自我心は依然として起こります。

起こりますが、アミダ仏がともにましますので、自我の煩惱がありながら、煩惱を浅ましい煩惱と知らされ、自我の煩惱の起こるにつけても、そのつどお念仏を申させていただくのであります。そこに「我汝と共にいる、我が汝の親なるぞ」との大悲にうるおされていくのであります。

(了)

至心回向欲生と

(和讃問答)

至心回向欲生と

十方衆生を方便し

名号の真門ひらきてぞ

不果遂者と願じける

(浄土和讃)

現代語訳 (アミダ仏は、心がけて念仏して浄土に生まれようとする自力の念仏者もなお見捨てずに真実に入る門に導き、遂には必ず真実の浄土に生まれさせようと第二十願を建てられた)

* * *

D 「このご和讃は弥陀の本願の中で第二十願について詠まれた和讃です」
N 「(至心回向欲生と) というのはどういうお心ですか」

D 「これは十八願の念仏往生の願を聞いて、念仏を称えるのですが、十八願のお心がいまだただけいなから、易行のお念仏を称えていく者に対してのアミダ

仏のお誓いだと私は受け取っています」

N 「ではこれはどういうお誓いですか」

D 「(至心) とは心を致してであり、(回向) は念仏を称え、それを浄土に振り向けてであり、(欲生) とは浄土に生まれようという心です。つまり十八願は(我が名を称えるばかりで浄土に生まれさせる) という誓いですが、この願の大悲心がいただけず、念仏申すばかりで助けていただけると受け取って念仏を励んで浄土に往生しようとする、そういう人を十八願の救いに導こうとのお心を(至心回向欲生と) と詠われるのであります」
N 「十八願は(十声なりとも念仏申すばかりで浄土に生まれしめん) という丸助の救いを信じるものを浄土に生まれしめんとお誓い

ですね」

D 「ええそうです」

N 「この念仏往生の誓いを聞いても信じることができず、念仏だけは申している人、そういう人が当然出てきますね」

D 「ええ。念仏は申すけれども本願を疑うのですね。疑いながら念仏を称える。称えて浄土に生まれようと励むのですね」

N 「疑いながらも念仏を称えていけばいつかは救うて下さると、自らの念仏の功德を頼みにしている人ですね」

D 「ええ、念仏往生の願を信じてことができなくて、

「お念仏さえしていけば、いつかは浄土に生まれさせて下さる」と念仏に励む。しかしこれは、アミダ仏の絶対平等の救いのお心を無視してどこまでも自分の方に助かるタネを作ろうとしているのです。ですから如来様が「まるまる助ける」と仰せ下さる大悲のお心が通らないのです」

N 「アミダ仏の救いがなおただけで、自分の称える念仏を頼みにしている者を

なお見捨てないお心が二十願のお心なのですね」

D 「ええそうです。そういうお心を二十願に「至心回向欲生」と表され、有り難いことに、そういう者を見捨てず、称えているお念

仏を縁として真実の浄土に導き遂には真実の浄土に生まれしめようとの願が二十願です。ですから、二十願は真実に入る門という意味がありますから真門といわれるのでありましょう」

N 「不果遂者とは」

D 「果たし遂げずば、という意味で、遂にはきつと真実の浄土に生まれしめずはおかないというアミダ仏の願心です」

N 「果遂の力がお念仏にはこもっているということでしょうか」

D 「ええ、その通りです」

N 「なぜお念仏（名号）にはそのような働きがこもっているのですか」

D 「もともと名号は「そのままなりで助ける、助けずにはおかない」というアミ

ダ仏の大悲の御名です。この御名の

お心いわば十八願を聞きつけていくと、この御名にこもっている丸助けの広大な大悲心がいつのまにか行者の心に流れ込んで、真実の信心となつて下さるのでしよう」

N 「しかけは南無阿弥陀仏という名号の中にあるのですね」

D 「ええ、南無阿弥陀仏は大悲の血潮の塊ですから、はじめはその大悲が分からなくても、念仏しつつお念

仏のお心を聞いてみると、我が心に大悲が届くのですね」

N 「いつ届くのですか」

D 「いつとは限定できません。今かも知れないし、十年先かも知れないし、もつと先かも知れません。ただお念仏を称え聞いている人はいつでも今アミダ様にあ

える可能性の中にあることだけは間違いありません」

N 「とかく、まだまだ先だと思つてしまいます」

D 「いつでも今ここに喚びかけて下さっている大悲の仰せです。いつでも今遇うことが可能なほどの強力なお力が南無阿弥陀仏の一句

にこもつていて働いて下さっているのです。ですからいつでも聞法は今です。今のお助けを今聞くのです。長綱をはつて、いつかはと先ばかり眺めていては、今のお助けを聞き逃してしま

います」

N 「どこまでもお念仏は今のお助けなのですね」

D 「ええ、へそんなお前だからこそ助けるのじゃあな

いか」のお心、そういうお念仏、それが今口に現れ耳に聞こえて下さる南無阿弥陀仏です」

N 「有り難いですね」

D 「アミダ仏はそこまで私たちのことを心配し導こうとされる広大な大悲なのですね」

(了)

〈遠方法話予定〉

○七月五日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談

○七月十七日から十九日。福井別院。法話・座談。午後七時より「心の講座」

○九月十四日。福井別院・午前。法話・座談。

○九月十七日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。

○九月二十六日。札幌市。昭念寺（真宗興正派）。午前・午後。法話

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

《二〇一八年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名（敬称略）

青木宏克・赤股一夫・浅野真由美・蒔進・足立美明・石川紀美子・稻田富恵
・井上守・今村光志・岩谷龍・岩田能一・植田節美・小澤ちづ子・小畑住子・
香川郁夫・加藤忠・鹿野良子・川端靖雄・喜多真澄・窪ナル子・古賀智敏・児
玉慶子・佐藤孝幸・下野誠二・下野知恵子・城越香織・白石千鶴子・寿賀晴剛
・関有江・谷村往世・津田衛一郎・土居令子・長井一江・中川政二・中野タカ
子・中村千和男・中村暢明・中村穂積・中村耕造・中村ホミ子・中村幹夫・七
村文子・西山恭夫・西塚祥子・能登昇志・野原佳子・長谷川満・泰京子・濱秀
子・林久司・平田幸子・原崎佳水・福井靖弘・福村義明・前田ふくの・町百合
子・宮伊勢子・三宅真知子・宮野勲・宮野エイミ・宮野純孝・宮野道子・室塚
良治・村瀬松三・森野茂治・山下東洋栄・山科瞳・山下征洋・横田ミチ子・吉
ノ蘭睦枝・山下悦子・石田君代・萱島聖志

合計 三〇〇〇〇〇円

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派（東）本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。合掌

